

かわいいコンビニ店員飯田さん

# 軋むほど君を抱きしめて

作 池内風

平野 涼介（ひらの りょうすけ）・・・二人の恋人  
森山茜（もりやまあかね）・・・涼介の恋人  
大河内咲（おおこうちさき）・・・涼介の恋人

涼介の部屋。夜。

上手奥にベッド。下手奥にローテーブルと椅子が並んでいる。  
椅子には、平野涼介、大河内咲が座っている。  
気まずい雰囲気漂っている。しばらくして、

涼介 ……

咲 ……

涼介 ごめん。

咲 ……

涼介 ……ごめんって。

咲 えっ、なんで怒ってんの。

涼介 いや怒ってないよ。

咲 ……

涼介 ごめん……

咲 茜って誰？

涼介 ……だから、前の前の彼女だよ。

咲 普通さ、間違える？

涼介 ごめんって。

咲 ……

涼介 咲。（涼介、抱きしめようとする。）

咲 ちよつと、なに？

涼介 えっ……あつ、いや、えっ？

咲 いやいや、タイミング。ここじゃないでしょ。

涼介 ……

咲 女は最終的には抱きしめれば良いと思ってるんですよ。

涼介 なんでそんな捉え方しか出来ないの？

咲 だってそうじゃん。そんないやな顔で、義務みたいに抱きしめられても全然嬉しくないから。

涼介 そんなつもりじゃないって。

咲、拗ねる。

涼介 ……

咲 なんてさ、怒ってんの？

涼介 怒ってないよ。

咲 怒ってんじゃないよ。えっ、誰が悪いの？

涼介 いや、俺だけど。

咲、拗ねる。

涼介 ……

咲 怒ってんじゃない。

涼介 いや……謝ってるでしょ？

咲 謝ればいいと思ってるんでしょ。

涼介 いや、悪いと思ってるよ。だから謝るし、本当に申し訳ないと思ってる。でも、素直に謝ってもずっと拗ねてるし、抱きしても嫌だって言うし、どうしたらいいかわからない。

咲 私が悪いの？

涼介 いやだから、もちろん俺が悪いよ。だから謝るしか出来ないじゃん。どれだけ気持ちを込めて謝っても、咲たんが俺の謝罪を疑ってたら、どんな言葉も嘘になっちゃうじゃん。

咲 ……

涼介 俺はさ、咲たんの誕生日で何を買おうかずっと悩んでさ、毎日仕事帰りに閉店間際のお店見て回ってさ、いろんな人にどういうプレゼントがいいか聞いて、ずっと咲たんのこと考えてたんだよ。どういうのが喜んでくれるのかなあ。とか考えて。でも、思ったんだよ。こうして喜ばせたい人がいるって幸せだなって。今まで付き合ってた子達の時はこんなこと思わなかったし、誕生日なんて面倒くさいとすら思った。でも、今回初めてさ、祝い事っていいな。って思ったんだよ。その人の事を思い合う。きつかけを作ってくれてるって。だから記念日とか大事なんだなって。

咲 ……

涼介 だから、こんな肝心な時に名前を呼び間違えちゃう俺が、間抜けなんだけど、でも俺は、今日というこの大切な日をこんな気持ちのまま過ごしたくないんだよ。ごめん。本当にごめん。

咲 ……

涼介 ……

咲 ここだぞお……

涼介 えっ？

咲 ここだよ、ギュツとするところ。

涼介 あっ。ごめん。(と、抱きしめる。)

咲 ああ、ごめんって言いながら。台無し。

涼介 ごめん。

咲、涼介、しばらく良い感じ。優しい時間が流れる。

咲 さっき名前言った子の時も祝い事は面倒くさいって思った？

涼介 思ってた。あっ、でもあの子とは付き合って半年でお互いの誕生日を迎えないまま別

れちゃったから。

咲　　なんで、急にお誕生日が大切だって思ったの？

涼介　　うーん。どうやったたら一番喜ぶかなあって思ってたら、気づいたら俺が幸せだった。プレゼントを渡すことより、相手のことを考える時間が大切なんだって思ったんだよ。

咲、涼介に身体を預ける。気づくと二人は恋人繋ぎで手を握り合っている。恋人だから当たり前なのかもしれないが。

涼介　　本当にごめんね。

咲、振り向き、見つめあった後ニツコリと笑う。涼介、微笑む。再度、身体を預ける。優しい時間が流れる。

咲　　ねえ。

涼介　　ん？

咲　　チュー。(と、目を閉じ口を差し出す。)

涼介　　ええ。

咲　　チュー。

涼介、少しじらしたあとで決意する、奥の扉が開かれる。女の子が飛び出してくる。

茜　　無理。もう無理いいい。

咲　　えっ……

涼介　　おい！

茜　　なんだろ、この気持ち。なんだろ、西野カナみたいなこの切ない気持ち。

咲　　えっ？誰？えっ？？

茜　　えっ、むしろあなたが誰って感じなんですけど。

咲　　・・・ちよっと！け、警察！(と、携帯を持つ。)

茜　　とうっ！(と、携帯を奪う)

咲　　わっ！

茜　　お預け。

咲　　返してください！！

涼介　　いや、ちよっとちよっと。

咲　　えっ？

涼介　　いや……あの……

咲　　何？どうしたの？

涼介　　うん……

茜　　涼介くんがお困りのようだからお答えいたします！私の名前は森山茜。どっかで聞いたことない？

咲　　いや……

茜 　　そう。お記憶が悪いんですね。さっき話してたでしょ？あ・か・ね。  
咲 　　ああ！前の前の彼女！！  
茜 　　そうそうそうそう、ちがぁーう！！前の前の彼女じゃなくて、その後の後の彼女！つまり、今カノ！！  
咲 　　はっ？どういうこと？  
茜 　　あなた浮気されてたんです。私もですけど。  
咲 　　はぁ？  
涼介 　　違う違う違う。  
咲 　　えっ？  
涼介 　　いや……  
咲 　　なに？ねえ！  
涼介 　　浮気じゃないんだ……  
茜 　　本気ってこと。  
涼介 　　違う。  
咲 　　違うみたい。  
茜 　　付き合ってるの？  
咲 　　当たり前じゃない。  
涼介 　　付き合ってもない。  
茜 　　付き合ってもない。  
咲 　　状況がよくわからないんだけど。  
茜 　　私も。  
涼介 　　うん……  
咲 　　ねえ！  
涼介 　　いや……なんて伝えるかを今考えてるんだけど。うん……  
咲 　　……  
涼介 　　言葉だけを受け取ると誤解されると思うんだけど……  
咲 　　なに？  
茜 　　ちよつと、そんな感じで詰め寄ったら涼介くんが本当の気持ちしゃべれないじゃん。  
咲 　　いやいやこの状況で誤解も何もないでしょ？  
茜 　　そうかもしれないけど。  
咲 　　物分り良いようなフリしてこんな時も良い女アピール？  
茜 　　待って、ごめん、聞き捨てならない。  
咲 　　彼女だったら普通怒るでしょ？  
茜 　　あの、勘違いしてるようですけど、この状況だからあなたが彼女で私が浮気相手みたいな感じになってるけど、これもし逆の立場だったら、あなたが浮気相手だからね。  
咲 　　何言ってるの？  
茜 　　想像して。もしここで私が涼介君といちゃいちゃして、あなたが押し入れに入れて、パンツ！って出てきたら、あなたが浮気相手みたいな空気になってたってこと。あなたはたまたま状況に救われているだけで、私たちは対等よ。  
咲 　　いやいや。

茜 あなた私の外見や雰囲気みて無意識で自分の方が、勝ってるって思ってますけど、漏れてますよ。その無意識。浅はか。

咲 あなたがそんな冷静でいられるのは涼介君に対して愛がないから。本当に好きなら冷静でいられないはずだもん。愛の反対は無関心。

茜 これが、無償の愛。

咲 都合の良い女。

茜 面倒くさい女。

咲 肯定主義者。

茜 かまってちゃん。

咲 厚化粧！

茜 ……(と、本気で凹む。)

咲 あっ……ちよつと、ごめん！そこで凹まれるとなんだか私が悪いみたいじゃん。売り言葉に買い言葉ってさ、お互いある程度飛んでくる言葉の攻撃力が増してくることはわかるから、受信する方はその許容範囲を自然と広げ合うじゃん！だから、まさか厚化粧でここまで傷つくとは……

茜 はあ！

咲 あっ、ごめん！

茜 あなたがここまでは大丈夫だろうという認識と本人が受け取る感受性は違うんだよ

咲 ……

咲 だからごめんって！

茜 ……

咲 ってかなんで私が謝ってるの！

茜 ……

咲 あんたはなんでさっきから黙ってたんだよ！

涼介 いや、白熱してるなって。

咲 よくこの状況で客観視できたな！

涼介 とにかく落ち着いて。

咲 待って待って！私が一人ヒステリック？この空気おかしいでしょ！

涼介、ソツと抱きしめに行く。

咲 いやいやいや！

涼介 ……？

咲 ……？じゃねーよ！さっきから抱きしめるタイミング何ひとつあってないよ！

涼介 正直抱きしめるタイミングって、この世で一番難しい空気の読み方だと思う。

咲 知らん！そして学べ！女子から学べ！！

茜 でああ、女子学！どこの恋愛教科書に書いてあるのかしら、女子学！

涼介 茜！

茜 はい！

涼介 その言葉、分かりづらい。全員が共通認識できない言葉をあたかもみんな理解してい

るように言わないで。

茜 ごめん……

咲 いいなりかよ！

涼介 茜……(と、抱きしめる。)

茜 涼介君……(と、抱きしめ返す。)

涼介 これかぁ！このタイミングかぁ！

咲 いや、タイミングは良いかもしれないけど、流れが不自然でしょ！ってか、そもそも

タイミングも二人だから成立する感じだったよ！

茜 涼介。(と、両手を広げる。)

涼介 ごめん、今のはタイミングの練習でただけだから。

茜 だよね！

咲 なんだろ、私の心が痛いたいの。

涼介 二人とも、いいかな……

咲 涼介くん？

涼介 今まで黙ってたんだけど、俺……

茜 ……

咲 ……

涼介 同時に二人を愛してたんだ。

咲 ……いやそうだろうよ。

ふっ、とみると茜はうれしそうな顔をしている。

咲 なんで『愛してる』ってとこだけ拾って喜んでんだよ！(と、肩を叩く。)

涼介 やめて。喧嘩はやめて。お願いだから。

咲 何でちよつと良い感じで止めてんの？

涼介 俺さ、ずっと疑問だったんだ。なんで一人しか愛してはいけないんだろうか？って。

なんで？

咲 なんでって。された側が傷つくからでしょ？

涼介 なんで？何で傷つくのかな？

咲 だって、自分が好きな相手といるとき幸せでさ、その幸せな時間を私と会ってないと

きに、違う女の子に向けられていると思うと、辛いから。

……うーん。

咲 なんでピンと来てないんだよ！

ふっ、とみると茜もピンと来てない。

咲 あんたもだよ！

茜 私は、なんとなくわかる気がする。涼介君の気持ち。

涼介 こんなときに俺の点数稼ぎをするのはやめて。ここは率直な気持ちで議論したいんだ。

茜 ごめん……

涼介 日本も昔は上級武士が一夫多妻制だったとか、世界の違う国では一夫多妻制とか、人間以外の多くの動物は一夫多妻制を選んでいたりとか、そういう外堀から考えるんじゃないかと、もっと根源的な心理の中から導き出したいんだよ。

咲 なんか難しいことはわからない。

涼介 咲 たんは俺に浮気されたと思って怒ったじゃん。

咲 当たり前でしょ。

涼介 咲 なんだ？

咲 だから、裏切られたからでしょ？

涼介 咲 いつ？いつ言った？咲たんだけを愛すっていつ言った？

咲 言った言わないじゃないかと、付き合い始めた時から当たり前なことですよ！

涼介 咲 そうなんだよ。

咲 えっ？

涼介 咲 それが当たり前なのはわかるんだ。俺もそう思う。でもあるとき、その当たり前、誰が決めたのかなって本気で思ってた。

咲 誰が決めたからとかそういう問題じゃない気がするけど。

涼介 咲 浮気が世間一般的には良くないことってことは理解してるんだ。でも、それがなんでか明確な言葉で説明できる人っていないんじゃないかな？

咲 うーん……

涼介 咲 固定概念を一度疑ってみて。俺達が知らず知らずに理解してるってことって実は間違ってるんじゃないかって想像してみて。

咲 ……

茜 お茶入れよっか？

咲 ごめん。ほらっ、少しずつ俺の考えてることわかってきた？

涼介 ……

咲 これは大前提として伝えるんだけど、俺は本当に咲たんのこと好きなんだよ。本当に好き。

涼介 うん。

咲 添い寝っていいな、って思えたの咲たんが初めてだった。

涼介 咲 涼介くん、睡眠障害だったもんね。

涼介 前の俺なら誰かと一緒に寝るなんてこと絶対にできなかった。でも咲たんと出会って変わったんだ。何年ぶりだろ、安心して眠れたのは。

咲 涼介くん……

涼介 添い寝ってさ、気の合う人同士じゃないと成立しないと思うんだ。気づいてるのは、エネルギーのこととちよつとスピリチュアル的なんだけど。

咲 私もそう思う。涼介君といるとなんだか落ち着くし。

涼介 うん。俺咲たんのこと好きだよ。本当に好き。

咲 私もだよ。

涼介 ねえ、俺思うんだ。なんで人間は人を殺してはいけないのだろうか？って。

咲 えっ？

涼介 いや、俺が殺すとかじゃなくて、あくまで理論の話で。

咲 ……

涼介 ……

咲 ……

涼介 ……

咲 ……

涼介 ……



咲 うん。

涼介 例えば、俺がここで茜を殺したとするよね？グチャって。多分相当な罪悪感を感じると思うし、一生記憶から離れないショッキングな出来事になると思う。でも、その生理的に発生する嫌悪感や罪悪感ってどこから何が原因で生まれてるのかな？

茜 はい、お茶です。

涼介 ありがとう。

茜 何の話？

涼介 申し訳ないんだけど、少し席外してくれるかな？少しだけ。

茜 わかった。

涼介 どう思う？

咲 血が出てたり、痛々しい傷跡があったり、そういう時の顔ってきつと人間が普段想像できる表情をしない状態で止まってるから。とかかな。

涼介 そうか、じゃあそれは日常想定しえない、経験のない状況が、不安を募らせ、気持ちが煽られていくってことかな。

咲 うん、きつと。

涼介 じゃあ、なんで殺しちゃいけないの？

咲 これも親が悲しむから。

涼介 親がいなかったら？その人が死んで、悲しむ人がいなかったら？殺していい？

咲 それでもダメ。

涼介 なんで？

咲 ……

涼介 ダメだよ。もちろん人を殺しちゃダメだよ。でも、そう思うのって何でだろう？

咲 ……

涼介 こういうこと考えるとき、疲れるだろ？答えなんて出ない。出ても、何も変わらない。

咲 だから人間は思考を簡略化させていくんだよ。

涼介 どういうこと？

涼介 人殺しイコールいけないこと。って、考える方が遥かに楽だろ？だからある意味刷り込みみたいな感覚で自然とそういう社会共通の定義に思考を支配されるんだ。

咲 うーん……

涼介 さつきもう少しのところまで考えられてたじゃん。その感覚って絶対に大事だよ。

咲 うん。

涼介 俺は思う。何で二人の人を愛してはいけないのだろうか？って。

咲 うん。

涼介 人間ってさ、浮気をされた事実で怒ってないかな？浮気イコールいけないこと。っていう世間の刷り込みで決めつけて怒ってないかな？

咲 うん。

涼介 俺、初めて好きになった人に浮気されたんだよ。

咲 知ってるよ。それがきっかけで睡眠障害に陥ったって。

涼介 苦しくてさ、辛くてさ、眠いのは今相手が何をしているか考えているだけで、ストレスで寝れなくて。その辛さってやっぱり愛の反作用で、俺はその愛に苛まれた。どう

うん。  
しても嫌いになれなかったんだよ。

涼介 苦しみの中で必死に心を探ったとき、ふっと思ったんだ。何で浮気はいけないんだろうか？って。ビックリしたよ、解らなかったんだ。理由が。なんで、なんで、っていきなり好奇心の種が頭に咲き出した途端に気持ちが悪くなった……。三人で付き合うのって有りなことなのかもしれない、いやむしろ！それがいけない理由なんてないのかもしれない。って。

咲 でも、もしその関係で子供が出来たらどっちの子か分からないとかあるんじゃないの？

涼介 もちろんそれは考えたよ。でも、どっちの子かは生まれてくれればすぐ分かるし、二人には話したんだ、どちらかの子を産んだら、次は必ずもう片方の子を産もうって。

咲 ……

涼介 そう提案したら、フラれたんだ。気持ち悪いって。元々あなたのこと好きじゃないって。夏、花火一緒に観たら雰囲気が好きになっちゃって、勢いで一回したらそうでもないって気づいたけど、なんか申し訳なかったからそのままズルズル付き合ってたって！週に一回義務で会ってて、同じ空間にいると自分までレベルが下がる気がして一緒に外歩くのが辛かったって！！会うたびに買ってきたプレゼント、センスが悪いから全部お寺に持って行って行って焼き捨ててもらったって！！わああああああ！！！！

茜、声に気付कि慌てて入ってくる。

咲 涼介君！！涼介君！！

茜 どうしたの！

涼介 ああああああ！あああああ！

咲 落ち着いて！！フラッシュバックしちやってる！！トラウマ、フラッシュバックしちやってる！！

涼介 ……あなたが私を好きになればなるほど、幸せそうな顔を見ればみるほど、私の気持ちは冷めていった。って……

涼介君……

涼介 俺から離れないでくれよ……お願いだから。お願いだから……

茜 離れるわけじゃないじゃん！！だって涼介のこと好きだもん！！

涼介 咲たんは？咲たんどうかな？

咲 ……

涼介 固定概念を疑って、浮気イコールいけないこと。これはただの刷り込みだよ。わかるでしょ？

咲 ……

茜 犬に餌を与えるときに必ず鈴の音を鳴らすようにしていたら、その鈴の音を聞いたとたんによだれが垂れる？的な。

涼介 そう！パブロフの犬みたいな論理で、条件反射的に、浮気イコール悪いことイコール怒るが結びついてないかな？もし、もし咲たんがそうなら本当の心を探ってほしい。

どうかな？

……

わかった……もうわかったよ……

何が？

咲 咲たんは正しいよ。やっぱり普通じゃない考えだもんな……

咲 そうじゃないけど。

涼介 いや、もういい……

咲 なにがもういいの！

涼介 咲たんが、この関係を望んでないことはよくわかった。そんなの理解してくれないよね。

咲 そんなことないけど、気持ちの整理が追い付かないよ。

涼介 いや、きつとその気持ちは片付くことはないよ。汚れていく一方。やっぱり今までの子と一緒にだよ……

咲 ちよつと待って！

涼介 俺は、咲たんが好きだよ！もう好きで好きで……もう……好き！！でももうどうしようもない。

咲 じゃあ、ずつと一緒にいようよ！

涼介 でも俺は変わらないよ。こういう複数の人を同じレベルで愛す人間のことをポリ・アモラスっていうんだ。一般的な価値観で言ったら……病気だよ。でも俺の中では当たり前な価値観なんだ。理解してなんてよほどのことじゃないと言えないけどね……咲たんが幸せなら俺も幸せ。でも、俺の幸せが咲たんを悲しめるのであれば、もう終わりにするしかない。俺は好きな人を悲しませてまで幸せになんてなりたくないんだよ。

咲 やだ！別れたくない！！

涼介 でもどうすることもできない！咲たんが変われなければ、この状況は変わらないよ……い……

咲 ……やってみるよ。私……もうどうなるかわからないけど、やってみる。

涼介 君には無理だよ。

咲 君って言わないで！もう遠くにいった気がするじゃん！やるよ、別れるくらいなら我慢してその関係が続けるよ！

涼介 我慢じゃダメなんだよ！理解して納得出来ないと、常に不安を抱えるんだよ。いつかきつと耐えられなくなって離れていくんだ！

咲 離れないよ！とにかくやる！

涼介 君には無理だ！！

咲 君って言わないで！！

涼介 ごめん……ごめん……悪いのは全部俺だ。ごめんよ。

茜 涼介……

涼介 茜ももう終わりにしよう。

茜 えっ！！なんで！

涼介 一度全部リセットしたいんだ。

茜 私、浮気肯定派だよ！！

涼介 これは浮気じゃない！！愛の話だよ！わからないだろうけど……

茜 ……わかるよ。私も、ポリアモラス、ポリーリだから。

咲 えっ……嘘でしょ……

茜 本当。あなた、最初に言ったでしょ？本当に好きなら冷静でいられない。って。私たちポリーリには、嫉妬心がない。正確に言うとうち自分の心理と論理構造を理解した上で、つまり、その状況を当たり前のことと認識した上で、その感情をコントロール出来るようになってるの、ポリーリは。だから、冷静。

咲 でも、押し入れから出てきたときは動揺してたじゃないですか。

茜 あれは、単純にあなた達が終電間際改札前のカップルみたいな雰囲気だったから。つい……「なんでえ、お誕生日が大切って思ったのお？」「チュー……。チュー。」

咲 ……恥ずかしい！！

涼介 なあ、いつから？

茜 私は物心ついた時には、ポリアモラスだった。なんでこんな複数の男性を欲するんだろうって？最初はヤリマン症な自分に悩んでたけど、ポリアモラス、ポリーリだって知ってから楽になったんだ。

涼介 そっか……

咲 ヤリマンの思想とそのポリアモラスって別なんじゃ……

茜 どういうこと？

咲 だから、ヤリマンっていうのは何か寂しいとか、モテているように錯覚して安心していけるような心理状況のことでしょ？ポリアモラスってそもそも複数人を愛することを指す。って。

茜 ヤリマンをそんな偏見で片付けないで！彼女たちの悩みっていうのはもっと根深い

咲 問題よ！抱かれれば抱かれるほど落ちていく気持ち、あなたに解る？

茜 すみません……

茜 私には嫉妬心はない。涼介がもし他の女性のところへ行っても私は平気。それが相手への愛だとは思わないけど当たり前のことだと受け入れてる。意外と楽になるよ、複数人を愛せるって。だから私、あなたのことも愛せると思う。

涼介 茜！

涼介、不意に茜を抱きしめる。

涼介 君は、君は僕の味方だ！！

茜 涼介……

涼介 茜！

茜 涼介！

涼介、茜、激しく抱き合う。

涼介 タイミング、合ってたよね？

茜 うん！

涼介、茜、再び抱きしめる。

茜 涼介。

涼介 うん。

茜 チュー。

涼介 ええ。

茜 チュー。

咲 ……ちよつと待って！！！！

涼介、茜、考えている咲を見ているが、我慢できなくなりもう一度キスをしようとする。

咲 待って！！！やっぱりやってみる、複数恋愛。

涼介 無理だよ。だって今だって耐えられなくて止めたじゃないか！

咲 今のは違う意味で見えられなくて止めた。押し入れから出てきたあなたと同じ。

涼介 ……

茜 ……

咲 やってみる、ポリアモラス！

涼介 さつきも言ったけどポリアモラスっていうのは、やろうとしてするもんじゃないんだよ！

咲 確かにそうかもしれないけど。気持ちと考え方を理解した上で、嫉妬心がコントロールできるって言いましたよね？

茜 はい。

咲 だから、理解できるように考えてみる。そして、その一步目を今ここで証明する！！

咲、携帯を掴む。

涼介 証明って何する気だよ！！

咲 今からあなた達にはここでセックスしてもらいます！！それを私が撮る！！

涼介 何で！何でそうなった！？

咲 今ここで、最も耐え忍ばなくてはならないであろう行為を目の当たりにして、私がその境地に達成できたなら、私をポリアモラスと認めてもらいます！！

涼介 飛躍してる！話が歪曲しすぎて、飛躍しちゃってるよ！！落ち着いて！！

咲 捨てられるより、マシだよ！！一人でいるなら……三人が良い！一人でいるくらいなら……

茜、上着を脱ぎ始める。

涼介 何でノリノリなんだよ！！なあ、徐々にでいいんじゃないかな！！徐々に！！

咲、無視して動画アプリを探す。

涼介　なあ！！

咲　ごちゃごちゃとうるさい！！私をここまで翻弄してわけわからない感情にして、今更なに言ってるんだ！！簡単だろ！！やれ！早くやれえ！！！！

涼介　無理だ！こんなムードもない中で、撮影されながらするなんて！！

咲　何、女みたいなこと言ってるんだよ！！こっちはもう腹くくったよ！！お前らの性行為をプラスに受け止めてやるよ！！ほらっ、早く！！

茜　涼介！！

茜、涼介を抱きしめて倒す。

涼介　やめろ！やめろ！！

咲　さあ、早く！早く！！いけえええ！！！！

茜　涼介、涼介えええ！！

涼介　やめろおおおおおお！！！！

咲　……

涼介　嘘だよ！全部、嘘！！！！全部、浮気を隠すための嘘だよ！！！！すみません！！！！すみませんでした！！！！

咲　そうだろうと思っただよ……よくもペラペラと……。あなたは、ただの浮気性なだけ。ただそれだけ。あなたのやっていたことは理解ではなく、洗脳。騙されそうになっただけ、やっぱり胸の棘は刺さったままだった……。

涼介　ごめん、ごめん！！

茜　ねえ私、そんなに拒否されるくらい嫌いだったの？

咲　もう別れよっか？

涼介　えっ？

咲　涼介君みたいな人と付き合っていくことなんて出来ないよ。

涼介　もうしないから！

茜　ねえ？

咲　なんでそんなに私に執着するの？もっといっぱいいるって、言うこと聞いてくれる子がさ。

涼介　咲たんじゃないとダメなんだ。咲たんじゃないと、また寝れなくなる。また夜が怖くなる……

咲　そんなに必要としてるなら浮気なんてするなよ！なあ！

涼介　……すみません。

咲　……許してあげる。

涼介　えっ？

咲　許してあげるよ。

涼介　ありがとう！咲たん、ありがとう！

咲 その変わり、結婚して。

涼介 ……

咲 二度と浮気なんてさせない。一生縛り続けてあげる。私が、一生。

涼介 ……

咲 茜さん、ごめんなさい。この人があなたを傷つけてしまった。

茜 結局私は、ポリアモラスだって告白しただけで、最後一人？複数愛者が一人ですか。

咲 ごめんなさい。でも、複数の人を愛せれば、もっと楽になる。っていう言葉とても響

きました。私は実際には無理だろうけど、少し理解できた気がします。

茜 そう。あなたとは何か良い友達になれる気がする。

咲 そうですね。

茜 涼介……

茜、涼介にビンタした後、ほっぺにキスする。

茜 バイバイ。

茜、去る。

咲 さ、婚姻届出しに行こう。今すぐに。

涼介 はい。

完